

各論

(第2部13・14)

「民族精気」の虚妄を衝く

下川 正晴 (元毎日新聞ソウル支局長・論説委員)

「鉄杭神話の真実」「旧総督府庁舎の解体」(『反日種族主義』第2部13・14)の筆者である金容三氏は、元『月刊朝鮮』の敏腕記者だ。私は毎日新聞ソウル支局長として親交があった。毎日新聞は朝鮮日報と提携関係があり、ソウル支局は朝鮮日報の建物内にあったからだ。金氏は当時「歴史に強い記者」として定評があった。『月刊朝鮮』の趙甲済編集長の秘蔵っ子だった。

金容三氏が本書のもとになる記事「金泳三政権は風水政権か」を書いたのは、『月刊朝鮮』1995年10月号である。私は前年4月には東京本社に転勤していたから、「解放50年」を迎えたソウルを直接的に体験取材したわけではない。だが記憶の底に、朝日新聞が「鉄杭神話」をめぐるおかしい記事を書いたという印象がある。拙稿の執筆を機会に調べてみると、まさに案の定だった。

朝日新聞のお粗末な提灯記事

1995年3月1日、朝日新聞夕刊の一面トップ記事「解放50年を迎える韓国／恨^{ハン}一掃へ国民運動」(次頁に写真)である。小見出しが「旧総督府／解体へ3・1式典」「風水信仰／弾圧の鉄杭撤去」であり、この記事はまさしく金容三氏が批判した「種族主義の象徴と幻想」に日本側で追従した稀有な記事である。元同業者の観点からすれば、恥ずべき提灯記事であると言うしかない。

朝日の記事の書き出しに曰く。「日本からの解放五十周年を迎える韓国で、一日の『3・1独立運動』記念日を皮切りに、植民地時代の名残を一掃する政府肝いりの国民運動が始まった。日本の手で勝手に変えられた地名の復元、風水信仰を抑え込むため聖なる山々に打ち込まれたと伝えられる鉄杭の撤去、さらには生活用語からの日本語追放まで、多岐にわたる。新たな『反日』というよりも、植民地時代の『ハン(恨)』を自力で解き放ちたいという韓国民の切実な願いに根差したものだ」

記事の筆者は当時、朝日新聞ソウル支局長だった清田治史氏(のち外報部長、取締役・西部本社代表)であり、同支局員だった渡辺勉氏(のちゼネラルエディター兼東京本社編成局長)である。つまり、のちに朝日新聞の国際報道のトップに上り詰める記者たちが書いた「お粗末記事」なのである。「聖なる山々」とか「恨」とか、抽象的な美辞麗句が目立つのが特徴である。

金泳三政権が推進した「鉄杭撤去」「旧総督府解体」運動は、当時から日本国内では朝日新聞を除いて、「噴飯もの」扱いであった。この二つがいまもって『反日種族主義』で糾

「解放50年」迎える韓国



岩山に深く打ち込まれた鉄杭を抜く際、北道清海郡のひとく、慶尚北道巨堤供

「恨」一掃へ国民運動

日本からの解放50年を迎える韓国で、一口の「3・1」独立運動(記念日を皮切りに、植民地時代の名残を一切する政府所りの国民運動が始まった。日本での勝利に変えられた発の復元、風水信仰を抑えむむたなる山に打ち込まれた鉄杭(つづみ)の撤去、さらには若用語からの日本語撤去まで、多岐にわたる。新たな「反日」というのも、植民地時代の「ハン(恨)」を口で解き放すという韓国国民の切実な願いに根差したものだ。

「われわれはもう立ち上がらなければならない(中略)他人からの独立まじりはない。足で立つのだ」

「3・1」独立運動70六周年の一日午前、旧総督府・興・国立博物館前で、上下同じの式典が、



朝日新聞東京本社 東京都中央区東區町丁H3番2号 電話 03-356-0131 〒100-11 朝日新聞東京本社 1995

大切にしたいクリンな地球
日立プラント

前回の入念な調査を... (きょう) 大抵、かたがたも休ばかりでも、夕メよね(編集委員・川村 二郎)

旧総督府 解体へ3・1式典 風水信仰 弾圧の鉄杭撤去



3・1独立運動記念会を前に、旧総督府解体を告げる生田宗の、リハサルする晴し子たち。2月27日午後撮影、東進門撮影提供

「3・1」は主体的な民族精神の発露の口、植民地統治の後である旧総督府に歴史からの退場を促すのにふさわしい(文化体育省)との判断による。ソウルの目抜き通りは太

「長年のトナがとれ心が...」

「3・1」は主体的な民族精神の発露の口、植民地統治の後である旧総督府に歴史からの退場を促すのにふさわしい(文化体育省)との判断による。

「3・1」は主体的な民族精神の発露の口、植民地統治の後である旧総督府に歴史からの退場を促すのにふさわしい(文化体育省)との判断による。

健康格言

弾されるのは、この病根がいかにか韓国社会に根深いかを象徴することになるが、拙稿で「屋上屋を重ねる批判」をしてもさして意味がないだろう。ここでは金容三氏の主要な論点紹介は簡略に留めた上で、二つの点を指摘したい。まず朝日新聞がなぜこんな「恥ずかしい記事」を掲載する羽目になったのかを考察し

たい。そこに見いだされるのは、慰安婦報道と同様な「根拠なき報道」の無残な残骸である。次に金泳三時代に流行した「民族精気論」「日帝謀略説」は、現在の文在寅政権でも生き延びており、しばしば大統領演説などで登場しているという点だ。韓国のゾンビ（蘇った死体）は異様なほどにしづといのである。

韓国における「民族精気」とは何か

金泳三氏が韓国大統領に就任したのは、1993年2月25日である。「いかなる同盟も民族に勝ることはありません」。これは就任演説で有名になったフレーズだ。現在の文在寅大統領の対北追従外交と通底する民族（ウリナラ）中心主義である。「同盟」も「民族」も抽象的な理念用語であることに留意する必要がある。

金泳三時代のもうひとつの重要なフレーズが「ミンゾクチョンギ」（민족정기）である。この言葉が韓国紙に出てくるたびに、私は何と翻訳すればよいか迷った。「民族精気」か「民族正気」か。発音は同じだがニュアンスは異なる。漢字に直しても意味不明である。

とりあえず「民族精気」と訳した上で、では「民族精気」とは何か。この点を愚直に探究したのが、^{キムヨンサム}金容三記者だ。（日本語でふりがなを付けると、^{キムヨンサム}金泳三大統領と同じになるのも、なんともおかしい）。

「記者は大統領官邸のスピーチライターから国立国語研究院にまでその定義を問いただしたが、どこからも明確な説明が出てこなかった」。これは同記者の雑誌記事を読んだ黒田勝弘（当時・産経新聞ソウル支局長）による要約だ（黒田『韓国人の歴史観』1998）。「韓国人にしか分からない独特の感情というべきか」と黒田は揶揄気味に書いているが、正確に言えば「韓国人にもよく分からない感情」なのであろう。

朴裕河（世宗大学日本文学科教授）は、2005年刊行の日本語書籍『反日ナショナリズムを超えて 韓国人の反日感情を読み解く』（韓国語版は2000年刊行）で、黒田と同様に金容三記者の記事に注目した。彼女は金記者について「（鉄杭撤去など）一連の動きに疑念を抱いて確認作業に乗り出した、著者の知る限り唯一のジャーナリスト」と書いている。のちに『帝国の慰安婦』（韓国語版2013年）で慰安婦への名誉毀損の有罪判決（控訴審）を受ける羽目になる朴教授は当時、歴史の真相探求が犯罪に仕立てられることを予想できなかったに違いない。韓国では、真摯な歴史探求者は危険な職業である。

ともかくここでは「民族精気」という言葉は、韓国人の誰も「明確な説明ができない」言葉であることを確認しておく。

韓国人の「恨」とは何か

朝日新聞の記事（1995年3月1日夕刊）で注目されるのは、「恨」に関する注釈が付いていることだ。曰く。「恨み、悔恨、悲哀などが無いまぜになった情感を示す。長い受難の歴史の中で、民衆の抵抗の源にもなってきた」。これも分かったような、よく分からぬ説明である。意味不明の「民族精気」を中心軸にした「風水信仰」を根拠に、韓国政府は「日帝による断脈」を一掃するために、旧総督府解体や鉄杭撤去に乗り出した、と朝日新聞は伝えたわけだ。しかしながら記事の結論的キーワードは、依然として「恨＝民衆の抵抗＝

反日」である。記事の底意が見え透いていると言うしかない。

韓国人の「恨」とは何か。ためしに朝日新聞が慰安婦報道で引用した『朝鮮を知る事典』（平凡社、新訂増補2003）を覗いてみると、そこには「恨」について、以下のように書いてある。

「朝鮮語で、発散できず、内にこもってしこりをなす情緒の状態をさす語。怨恨、痛恨、悔恨などの意味も含まれるが、日常的な言葉としては悲哀とも重なる。(中略)韓国では植民地時代から解放後の〈外勢〉と〈独裁〉のもとで恨は〈民族の恨〉として強く意識されてきた(後略)」(執筆・金学鉉)。

朝日新聞の「恨」解説と似たようなタッチであるのが面白い。朝日記者は「事典」を参照したと見てもおかしくはない。新聞記者が知ったかぶりの「民俗学用語」を記事に援用しただけのことなのだ。これは新聞コラムでよく見られる傾向だ。

この『事典』には朝日の慰安婦報道の訂正前後に、批判が相次いだ。「従軍慰安婦」について古参研究者の宮田節子(元早稲田大学講師)が「(19)43年からは〈女子挺身隊〉の名の下に、約20万の朝鮮人女性が労務動員され、そのうち若くて未婚の5万~7万人が慰安婦にされた」などというトンデモ解説を記述していたためだ。

2014年になって『新版 韓国朝鮮を知る事典』と改称され、内容も改訂された。前掲書が「今日の批判に耐えないものも少なくない」(監修者代表・吉田光男)と判断されたためだ。「従軍慰安婦」の記述は「日本軍慰安婦」として項目名も変えられ、執筆者も三ツ井崇(東京大学大学院准教授)に変更された。権威ある事典という風評とは異なり、日本の朝鮮研究はその程度のレベルであることを抑えておきたい。

慰安婦報道と同工異曲

『反日種族主義』の金容三記者は、事実探求主義の正統派ジャーナリストである。彼は全国18カ所の鉄杭除去現場を訪ね、周辺の住民や公務員、専門家に取材したが、「日帝が打った鉄杭として明らかにされたものは、一つもありませんでした」と記述した。その事例を慶尚北道亀尾市、同金泉市など数カ所のケースを報告している。

一方、朝日新聞の前述記事によると、朝日記者は慶尚北道清道郡の事例を取材した。ところが「長年のトゲがとれ心が軽くなりました」という地元郷土史研究会会長のコメントは紹介されているものの、記事に言う「朝鮮総督府が風水信仰を断つために、気脈が走ると信じられていた岩山の中腹に打ち込んだとされる鉄杭(長さ二尺、直径三寸)」の真相は、まったく解明されていない。「信じられていた」「とされる」という伝聞・推定のみである。「日帝が地脈を断つために打ち込んだ」という伝承の根拠は何なのですか」。高校生の取材でも必須な質問が発しられていないのである。

そういう根拠不明の現地ルポを、「恨を解き放つ」という正体不明の美辞麗句で包装した、のが朝日記事の正体である。おぼつかない慰安婦証言を「連行」の虚仮威^{とげおど}しで包装した記事と同工異曲の方法であると言うしかない。

この記事の執筆者の一人である清田治史氏は、吉田清治氏の慰安婦連行証言を初めて取り上げた記事の筆者と目された人物だ。ところが本人からのちになって、当時は「韓国留学中だった」と申し入れがあり、結局、執筆者不明という奇妙な決着になった経緯が

ある(朝日新聞第三者検証委員会報告)。しかし、この「鉄杭撤去」記事では署名があるので、言い逃れが出来ない。先に述べたように「裏を取らない虚偽の報道は美辞麗句の衣装を着て現れる」のだ。メディアリテラシーの警句として記憶したい。

金容三氏による『反日種族主義』で物足りないのは、「日帝断脈説」のルーツに関する考察である。この点に関しては、本稿の文末で紹介した日韓研究者の諸文献が参考になる。これらの文献を読み込んだ水野俊平氏(北海商科大学教授)が書いているように、「鉄杭を打ち込んで風水上の脈を断つという考え方は、日本の植民地支配以前にあったもので、その鉄杭は主に中国(宋・明)によって打ち込まれたものとされていた。これが崔吉城『韓国・風水ナショナリズム』で指摘された通り、日韓併合後には日本によって打ち込まれたことになった」ものと思われる。「日帝断脈説」自体が根拠なきものとして否定されているのだ。

文在寅政権に続く「日帝断脈説」

野崎充彦『韓国の風水師たち』(1994)の「あとがき」によると、旧朝鮮総督府の「解体」に際しては当初、「ヒロヒト日王」(昭和天皇)の「降伏宣言」(終戦の詔勅)をBGMで流しながら、爆破する構想であったという(1994年6月9日付け朝鮮日報)。なんと馬鹿げた政権だったのだろうか。

「民族精気」を呼号するのは、現在の文在寅大統領も同罪である。

文大統領は2019年2月26日、ソウル市内の金九記念館で開催された異例の閣議で「親日を精算し独立運動にしっかり礼を尽くすことが、民族の精気を正しく立て直し正義のある国に進む始まりだ」(産経新聞2月26日付け)と述べた。そして3月1日の記念演説では「民族精気の確立は国家の義務」(中央日報6月10日付け)とぶちあげた。

8月15日の「光復節」演説では、抗日独立運動をした人物への報復として「日帝は彼の家を貫通する鉄道を敷いた」と述べた。これは慶尚北道安東市にある儒学者の邸宅のことを指しているのだが、『週刊朝鮮』(8月28日号)の現地ルポは「日帝報復説」を否定しているという。黒田勝弘が産経新聞のコラム「ソウルからヨボセヨ」(9月16日付け)で紹介した。黒田『韓国人の歴史観』(文春新書、1998)は、金泳三政権時代の知見をまとめた卓抜な特派員報告である。この著作を読めば、現在の文在寅政権の病巣が金泳三時代にほぼ出尽くしていたことが理解できる。

韓国語には「夢より解夢」という諺があるのだそうだ。崔吉城(下関・東亜大学教授)の小論文「韓国・風水ナショナリズム」(2003)で教えてもらった。「꿈보다 해몽이 좋다 夢より夢解きがいい(現実をいい風に考える)」である。韓国では事実より解釈が重要だという観点は、隣国理解のキーワードになりうる。その例外的存在が学界では李栄薫、言論界では趙甲済ほかであるに違いない。

先日、韓国人の博士号取得者二人(三十歳代)と話す機会があった。金容三記者が『反日種族主義』で取り上げた「鉄杭神話」「旧総督府解体」について、彼らは「なんか小中学生の頃に聞いた覚えがある」と述べるのみで、その真相がいかなるものであるかの理解はなかった。心もとない限りである。

『反日種族主義』の著者プロフィールによると、金容三氏は『大邱一〇月暴動、済州四・

三事件、麗水順天反乱事件』(2017)と題する著作を出版したようだ。最近の左派政権下で恣意的な解釈が横行している解放後の暴動事件である。その考察にも、彼らしい事実探求主義が貫徹していると信じたい。ひたすら愚直に、事実探求に徹する。これこそがジャーナリスト(時代の襲を記録する人)の生きがいであり、社会的使命であると強調しておきたい。

参考文献

- 野崎充彦 『韓国の風水師たち』(人文書院、1994)
黒田勝弘 『韓国人の歴史観』(文春新書、1998)
朴裕河 『反日ナショナリズムを超えて』(河出書房新社、2005)
水野俊平ほか 『検証 陰謀論はどこまで真実か』(文芸社、2011)
崔吉城 「韓国・風水ナショナリズム」『アジア遊学』第47号(勉誠出版、2003) 所載